



Title	市販教材ソフトは使えるか : 中国語入門/初級授業での実践
Author(s)	田邊, 鉄
Description	中国語CAI 実践レポート
Citation	漢字文献情報処理研究, 4, 90-95
Issue Date	2003-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46814
Type	journal article
File Information	kanji_4.pdf



市販教材ソフトは使えるか

中国語入門／初級授業での実践

田邊 鉄（たなべ てつ）

はじめに

TOEIC や TOEFL と言えば、英語の好きな人や英語を仕事にしている人のものだと思っていたが、最近はどうでもないらしい。物理学が専門の知人など「英語が苦手な理系に進んだのに」とぼやいているが、英語でのプレゼンテーションやディベート能力は、これまで英語とは無縁と考えられていたような分野で、より求められているようだ。

英会話学校に通ったり語学留学したりするほど、英語学習そのものにモチベーションを持ってないが、とりあえず英語ができなければならない。市販の英語学習ソフトの多くは、そのような人々を対象とした自習教材である。PC ショップのソフトウェア売り場には、ダイアログを中心とした会話教材や、資格試験向けの語彙集、タイピング・ゲーム、名作映画など多彩な教材ソフトが並んでいる。対象としている学習者も入門／初級から、上級者まで様々である。

英語に比べると少ないが、他の外国語教材も製品が出揃いつつある。特に中国語はこの2年ほどの間に、初・中級を対象とした教材ソフトが増えている。

現在のところ、中国語 CALL 授業は、主に教員個人が自主開発した教材で行われている。自由度が高く、教員の技量とPCの性能次第で、本当に「使える」教材が完成する可能性が高い。反面、開発を行う教員の負担が大きい。市販の「決定版」教

材があれば、それを使いたいと考える教員も多いのではないだろうか。本稿は、いくつかの市販中国語教材ソフトを、大学のごく一般的な（いわゆる「教養」の）中国語初級授業で利用する、北海道大学における取り組みについて紹介する。

利用する教材は大きくわけて2種類ある。ひとつは通常の教科書と同じように、ダイアログを中心に、語彙、語法、作文ドリルなどを取り合わせたオール・イン・ワンのコースウェアである。もうひとつは、リスニング、語彙など特定の能力養成に特化した単機能教材ソフトウェアである。これらに加え、外国語教育一般、あるいは、コンピュータ利用教育一般向け教室システムの、多言語対応についても紹介する。

北海道大学の CALL 授業現況

北海道大学では、2000年に最初のCALL教室が設置された。情報メディア教育研究総合センター（当時）が、教育用電子計算機システムの一環として企画したもので、言語教育部門が仕様策定に関与しなかったため、外国語教員の意見が十分には反映されなかった。外国語教育用ソフトウェアは、外国語教育部門でサーバごと別途用意したが、計算機システムの仕様との不整合を起こす原因になった。その後、言語教育部門と情報教育部門の間で、「次期教育用電子計算機システム更新時に、言語教育システムの見直しを行う」という一応の合意を見た。

ところがその後の調査で、市販の CALL 教材ソフトウェアは、メディア・プレイヤーやブラウザのバージョン、ライブラリなど、特定の環境を要請するものが多く、情報教育のシステムと一元化するのが難しいことがわかった。そこで、教育用電子計算機システムと切り離れた、外国語教育専用システムの導入が決められた。

2002 年 9 月、LL 教室を改装した 60 ブースの CALL 教室が設置された。2003 年度中には、さらに 60 ブース×2 教室が運用を開始する予定である。

新設の 3 教室に、従来の 1 教室を加え、4 教室が揃った段階で、(1) 英語Ⅲ（2 年次配当）の 1 単位を CALL 化、(2) 独・仏・中の 3～4 クラスでの CALL 授業実施が可能になる。

中国語は、現在 2 名の教員が合計 3 クラスの CALL 授業を展開している。いずれも 1 年生配当の初級クラスである。授業では市販教科書『話す中国語北京篇』を用いているので、今回は、希望する学生 26 名について、各種ソフトウェアを使って復習や発展学習を行ってもらうことにした。

独習用コースウェア

サーバ・クライアント環境で使えるものとして、『ハイパー中国語・実用漢語課本』^[1]がある。北海道大学では、CALL 教室設置と同時に導入している。教科書の朗読、語彙、語法解説、置き換え練習などが、全てデジタル化されており、自習用には最強の教材の 1 つと言える。ただ、準拠する教科書の内容が多すぎて、特に週 2 回しか授業のない理工系クラスでは、「消化不良」を起こす学生が多かった。ペアで担当するネイティブ教員からも「CALL 教材があるという理由だけで、この教科書を採用し続ける意味があるのか」と疑問の声が上がった。やむなく、この教材の利用は自由登録制とし、カリキュラムから外すことになった。現在のところ、中国関係の専門を志望する 2 年生や、留学希望者を中心に、40 名程度が利用登録している。動画など見た目に派手な機能はないが、自分の発音を録音し、ネイティブの発

音と聞き比べる機能のように、独習用教材に必要な十分な機能を搭載しているので、対面授業の補助というよりは、いわゆるフリー・アクセスの授業に向いているのかもしれない。

これ以外のソフトは、基本的にスタンドアロンでの（個人の）利用が前提であり、学習履歴や成績をクラス毎に管理するようなことはできない。CALL を採用して成績評価の部分で「ラクをしよう」という向きには、採用をためらわせることになる。ただ、教科書を完全にデジタル教材に置き換えるつもりがあれば、使えるかもしれない。

この種のソフトウェアは、『王老師の標準中国語シリーズ』^[2]や『北京言人』^[3]、『中国語快速完成』^[4]、『中国語完全マスター』^[5]などがある。今回は、比較的新しい『中国語快速完成』の入門篇を 14 名の学生が 3 週間試用した。

■『中国語快速完成』の出来

発音と基礎語彙を学ぶ入門篇、構文と表現を学ぶ初級篇、ダイアログで会話を学ぶ会話篇の 3 つのグレードに分かれており、おおむね、1 年生から 2 年生前期の 1 年半のカリキュラムに対応している。いずれも、音声 CD の付いた教科書『やさしい中国語快速完成』が同梱されている。2 色刷りの教科書は、イラストを多用し、大きめの文字で見やすい^[6]。

入門篇と初級篇は、北京語言学院の『口語』を思わせる置き換え練習に重点を置いている。ダイアログがない代わりに、基本表現に 10～20 の単語を当てはめた文が並んでいる。基本構文の徹底した反復練習と、語彙の増強を基本とする学

図 1 学習画面





図2 中国語学習の案内人?キャラクター

習法を想定しており、収録語彙数は入門篇だけで700を超える。日本で出版された教科書としては、トップクラスの語彙数であろう。

ソフトウェアは、アドベンチャー・ゲーム形式になっている。中国にゆかりのある主人公が、家に代々伝わる秘宝の謎を追って、中国に渡るというありがちなストーリーである。学習者はこの主人公に扮して、中国語の練習問題にチャレンジする。全問正解すると、謎解きのカギが与えられる、という具合だ。それぞれの練習問題は、教科書に完全準拠しているが、ゲームの内容は教科書とは全く関係ない。そもそも謎解きのためにチャレンジする問題が「ホテルにチェックインする」や「お土産を買う」といった旅行会話である。全問正解のご褒美である「謎」も（ネタバレはまずいのでここでは言わないが）ショボすぎるように思う（図2）。

ナムコのゲーム・デザイナー中村隆之氏は、いわゆるエデュティメント・ソフトについて、次のように述べている¹⁷⁾。

ためになる、とか、勉強の役に立つ、というのは、後から付いてくるもので、まず「面白いゲームを作る」ところからスタートしないと、いいものはできないと思います。その点で、教師の方の提案される学習用ゲームと、我々が考えるゲームとの間にはまだまだ開きがありますね。

ゲーム・メーカーの作るゲームと一緒にすることはできないが、市販の「教育・学習」ソフトに

搭載されるゲームは、面白いものが少ない。『快速完成』のゲームも、「教科書のおマケ」的色合いが濃い。ゲーム仕立てにすることによって、不必要な効果音や画像が増え、軽快な操作感は失われる。しかも CD-ROM で学習を進めるには、ゲームに参加し、キャラクターの「励ましの言葉」を聞かなければならないのだ。『完全マスター』が、高機能を目指しながら、学習画面は無駄な装飾を排し、ゲーム・モードは（『快速完成』以上につまらないゲームだが）完全にオプション扱いであるのと対照的である。

そもそも、これだけのボリュームの教科書であれば、対面授業で詰め込み、テストで締め上げれば一定の成果は上がる。授業でソフトウェアを利用するのは、「効率よく端から詰め込んでいく」とこと、「学習の進捗状況をテストで見る」ことをラクに行うためである。『快速完成』のゲームは、教科書の説明をそのまま電子化したものに、小問4～5問の「通過テスト」を付け加えただけのものである。教科書の補助に使うとしても、あまりに物足りない。90分の授業なら、練習問題だけで50問は楽々こなす。せめてそのくらいの分量が入っていなければ、大学の授業で、学生に一斉利用させるのは難しい。

■反応は上々だが…

今回は、入門篇の教材を用いて、既習の発音や基本表現を復習するようにした。対面授業はソフトウェアの操作や内容の説明のために、最初の1回だけ60分行った。その後、週3回90分の授業を行った。自習形式の教材であるが、今回は現行の授業に教材ソフトを用いることを想定し、学習はフリー・アクセスとせずに、決められた時間に教室に集まって一斉に行った。授業時間以外の自習については特に制限しなかった。

最終回には面接による発音テストと、語法のペーパーテスト、自由記入のアンケートを実施した。

教科書は全40課の構成で、週2回、半年間ではちょっと学習しきれないかな、という分量である。にもかかわらず、ほとんどが既習の内容とは

いえ、3週間で「全部やった」という学生が2人いたのには驚いた。

学生のほとんどは、この教材を用いて「役に立った」「役に立ちそう」と認識している。また、「自分の中国語能力が上がった」と感じる学生も半数を超えている。その一方で、「面白かった」「楽しかった」と感じた学生は少なく、学生のモチベーションを向上させるには、「面白いゲームを作る」こととは別の方策が必要であることをうかがわせる結果が出た。

発音は目に見えて向上した。特に母音の発音が「中国語に聞こえる」ようになったことは、全ての学生に共通して見られる、最大の成果である。ただし、発音能力の向上は、コンピュータ・ソフトの利用とはあまり関係ない。授業以外でこのソフトを利用しなかった学生と、自習を盛んに行っていた学生との間に、差はほとんど見られなかった。発音が向上した学生は、教科書付属の音声CDをよく聞いていた。音声CDを全く聞かなかった4名は、コンピュータ・ソフトの利用には熱心だったが、発音能力はさほど向上していない。もしかすると、コンピュータ・ソフトの利用は「あまり」どころか「全く」関係がないのかもしれない。

語法テストは、北海道大学の中国語統一試験と同じ、多肢選択形式で行った。中国語検定試験など、多肢選択試験の対策にコンピュータが役立つことについては、まず異論のないところであろう。今回もおおむね、好結果が出た。ただし、テストの範囲が教材全体のごく一部なので、印刷教材などと比較して、本当に有効性が高いのかどうかは、もう少し検証してみないと何とも言えない。

図3 正解すると爆竹が・・・



いずれにせよ『快速完成』を授業の全部または一部と置き換え、またはネタとして使うのは難しいものの、印刷教材と比較して圧倒的に高い効果を上げられるものではない。CALL 教室に全面的に導入することには慎重にならざるを得ない。

☞ 単機能教材ソフトウェア

語彙や発音など、特定の能力養成に特化した教材ソフトウェアは、「素材」「部品」として授業にアクセントを添えることができそうなものだが、ソフトウェアによっては、結構難しいこともある。

中国語 CAI 研究会でも紹介された『中国語発音講座』^[8]は、「授業でも自宅でも学習できる教材」を意図して作られたという^[9]。中国語入門時に必ず学ぶ音節表が、口元を見るためのビデオ付きで参照できる。これは、入門時にまとめて学習する以外に、中級者が発音を確認するための、いわば「音声辞書」として利用する、という使い方もある。発音を忘れさせないために、「いつでも音節総表に立ち返れ」と言ってみるものの、放っておいたら教科書の発音編など2度と開かない。パソコンでいつでも参照できる教材を用意することには意味がある。この教材を使った授業の進め方については、本誌創刊号の CAI 特集の中で村上公一氏自身が詳細に述べているので、そちらを参照してほしい。

『タイピングで覚える中国語の基礎 1・2』^[10]は、それぞれ HSK 甲級と乙級の単語を学ぶ、語彙学習ソフトである。学習は表示された漢字をピンインでタイプしていくだけ。成績表示や、間違えた語を集中的に学習する機能もある。正解すると鳴り響く爆竹の音がご愛敬（うるさい、という学生が多い）。このソフトは起動すると、3分から18分の設定した時間、延々問題を出し続ける。何問、という目標は示されないし、出題内容は前回間違えた語以外はランダムに決められる。独習ならいいが、授業で使うなら授業前5分ほどで、前回習った単語を10～20問だけ復習する、という使い方をしたい。「始め」と「終わり」がはっきりしない、だらだら続く単調な練習では、その

まま授業のアクセントとして使うことはできない。授業の進行に合わせて、ソフトの扱う語彙の範囲を細かく調整する必要がある。

ところが、このソフトウェア（および多くの同種のソフト）は自分でデータを作って読ませることができない。市販教材がまだまだ少ない今の状況では、自分の授業に合った教材を網羅的に集めようとすると、相当の部分が抜け落ちる。この部分は教材を自作するしかない。教材ソフトが出回るまでには、まだまだ時間がかかるのだから、このソフトのシステムだけを使い、単語データを入れ替える、クリア条件を自由に変更する、など授業用途の機能にぜひ対応してほしい。

このソフトは 19 名の学生が試用したが、たちまち「飽きた」と言ってくる学生が多く、あまり活発に利用されなかった。

ただし、販売会社であるフーシャン・メディア・ジャパンの担当者からは、「大学・教官・授業に合わせてカスタマイズしてもらえるのか」というこちらの質問に対し、前向きな回答を得ている。「サーバ——クライアント型の教材管理」や「学籍管理」にも、有償または無償で対応可能、ボリューム・ライセンスあり、ということなので、これから CALL システムを導入する、という大学ならば、開発に深くかわかり、ソフトを「叩き」まくる苦労を惜しまないという前提で、検討する余地はあるだろう。

❷ 汎用教材プラットフォームの多言語対応

北海道大学では、2002 年 10 月から ALSI の CALL ソリューション、CaLabo2000 を導入している^[11]。従来の LL 機能とコンピュータによる学習支援機能を組み合わせた製品である。CaLabo シリーズには、言語学習用のシステムであるにも関わらず、多言語に対応していないという欠陥があった。出欠やペア・レッスンといった授業管理機能はともかく、学習機能の中核である、汎用ドリル教材作成実行ツール「SmartHTML」と、音声教材作成ツール「ソフト・テレコ」で中国語

の文字が表示できないのは致命的である。この点について、2002 年 9 月の ALSI 担当者を交えた打合せの際に、中国語を含む多言語対応を要望事項として示した。同様の要望は、既に他の大学からも出されていたようで、「2003 年 3 月リリースの新バージョンで対応する」との回答を得た。

やや遅れたが、2003 年 7 月にリリースされた新バージョンでは、SmartHTML の教材サーバに Solaris を加え、データベースを Oracle にするなどの変更を行い、正式に多言語に対応した。

SmartHTML は、動画や音声を組み合わせた四択問題や穴埋め問題を簡単に作成でき、学習履歴や成績の管理に対応した、Web ベースのオーサリング・ツールである。単体でも利用可能だが、CaLabo シリーズの学習機能の 1 つとしての利用が想定されている。

北海道大学では 2003 年 9 月末から、新しい CALL 教室が稼動する予定で、従来のシステムも全てこの新バージョンに置き換えられる予定である。本稿執筆時点（2003 年 8 月）では、まだ稼動していないため、多言語対応の状況や中国語授業での利用について詳細なレポートはできないが、タイトル、問題文、選択肢等全ての入力と表示に中国語が利用できることを確認している。

多言語対応以外の部分については、目に見える変更はあまりない。「ワープロ感覚で問題作成」という謳い文句通り、動画・音声などのメディアファイルを選択し、テキスト・ボックスに必要な事項を入力するだけで問題が完成する。だが、問題をテキスト形式／XML でまとめて作って、読み込ませるといった、生産性を上げる仕組みは、前バージョンに引き続き用意されていない。

また、端末単位・時間単位での細かなアクセス制御に対応していないため、試験には使いにくい。たとえば、複数のクラスで同じ試験を時間差で実施するような場合、後のクラスの学生は、他の教室にある端末で、実施中の試験問題をこっそり参照できてしまう。ALSI によると、同社のサーバ製品 eNetLibe の機能を用いることにより、目的を達することができるそうだが、CaLabo と eNet は、本来異なるソリューションであり、その「継

ぎ接ぎ」で対応、というのは CALL システムをトータル・ソリューションとして提案する企業のあり方としてスマートとは言えないだろう。

ソフト・テレコは LL 教室のテーブルレコーダの機能を、PC 上で実現したソフトウェアである。教師卓で、CD などのソースからサーバに音声をアップロードすると、直ちに学生用 PC から参照できる。自分の声を録音して聞き比べるなど、LL 用テーブルレコーダの一通りの機能を、ソフト的に実現している。新バージョンでは、音声と文字表示をシンクロさせる機能が追加された。また、MD にダビングしたり、フロッピーなどのメディアに再生用ソフトとともにデータをコピーしたりすることが可能になり、教室外での学習にも対応した。

ソフト・テレコの新バージョンは既に導入済みで、2003 年度前期から初級授業 2 クラスで利用している。ただ、目玉の文字表示機能とメディアへのコピーはほとんど利用していない。

文字表示機能では、中国語の入力・表示ができる。原文と訳文、もしくは原文とピンインなど、2 種類の文字表示を切り替えることもできるが、原文とピンインと訳文といった 3 つの「字幕」を切り替えることはできない。結局、初級教科書の 8 文～10 文程度のダイアログであれば、ソフトの文字表示機能を使うよりも、ピンインと漢字を併記した教科書を見ながら聞く方がわかりやすい、というのが大半の学生の意見である。教員としても、教科書に書かれている内容を、わざわざ入力し直す手間はかけたくない。当初は漢字とピンインを貼り付けていたが、メリットがあるとは思えないので、学期途中で止めてしまった。

北海道大学情報基盤センターでは、オリジナル中国語教材の作成を予定しており、音声 CD の代わりに、ソフト・テレコ教材を収めた CD-ROM を配布することを検討している。ソフト・テレコは既存の教材を利用する「テレコ」ではなく、音声とテキストを含んだ、オリジナル教材を簡単に作成できる「簡易オーサリング・ツール」として利用するのが最も適当だと思われる。

📎 おわりに

以上、市販の教材を中国語授業に取り入れる試みについて紹介した。大学での中国語 CALL 授業は、まだまだ自作教材を用いることが多い。いくつかの教材を使ってみてその理由がよくわかる。

コースウェアは個人向けの製品がほとんど全てを占めており、大学の教室で用いるメリットは少ない。発音や語彙の単機能教材ソフトは、うまく取り入れれば効果を上げることができるが、欲しい教材が展開されているかどうかかわからない。また、汎用プラットフォームの多言語対応は進みつつあるが、言語教材の実行環境としては、不足する部分が多すぎる。

「いっそ使わない」というオプションが認められていない場合は、おおよそ、上記のような問題点を十分認識した上で、単機能のソフトを授業のネタに用い、足りない部分は、そのソフトをマネして自分で作る、というのが現実的な対応であろう。

注

- [1] 東方書店／クリエイト大阪、林要三企画・監修
- [2] マネージ <http://www.manage.co.jp/>
- [3] アークビレッジ <http://netpal.co.jp/china/>
- [4] 創育 <http://www.soiku-mm.co.jp/>
- [5] メディアファイブ <http://www.media-5.co.jp/>
- [6] ただし、課文がゴシック体であること、カナが併記されていることなどは、個人的にあまり好まない。
- [7] 2003 年 1 月北海道大学で行われた座談会での発言
- [8] 村上公一編、早美出版社、1999
- [9] 村上公一、「コンピュータによる中国語学習支援」、『大学教育と情報』Vol.10 No.4、私立大学情報教育協会、2002
- [10] フーシャン・メディア <http://www.fushan.com/jp/>
- [11] アルプス・システム・インテグレーション (ALSI) <http://www.alsi.co.jp/>